

ナミビア北東部ブワブワタ国立公園における 生業活動と地形・植生の関係

Relationship of Topography, Vegetation, and Livelihood of Local Residents
at Bwabwata National Park in Northeastern Namibia

芝田篤紀（京大大学院）

Atsuki SHIBATA (KyotoUniv.)

キーワード：国立公園，地域住民，生業活動，地形，植生

Keywords : National park, Local residents, Livelihood, Topography, Vegetation

1. 研究の背景と目的

アフリカにおける自然保護政策は、1980年代に入り大きな変革期を迎えた。それは、手付かずの自然を護る「原生自然保護」から、地域住民主体で自然を護ろうとする「住民参加型保全」への転換である。この時代の流れの中で、「住民参加型保全」の評価や地域住民への影響の解明が活発に試みられてきた。しかし、“「住民参加型保全」により保護された自然環境の実態”を議論するためには、保護される自然と地域住民の生活との有機的な関係を解明する必要がある。本発表では、ナミビア共和国北東部のブワブワタ (Bwabwata) 国立公園で暮らすクエ (Khwe) の生業活動が、周辺自然環境、特に地形と植生においてどのような影響と役割があるのかを検討する。

2. 調査結果

国立公園のなかで行われる生業活動と周辺自然環境の関係が明らかになった。それは、採集・伐採活動が周辺植生に与える影響、周辺環境における野焼きの意味、農地の開墾位置と地形の関係である。また、公園内の自然環境について、空間や景観に着目した調査からその状態が明らかになった。それは、対象地域に特有の旧流路地帯の地形と植生の関係、国立公園内に設置された多角的利用区域と管理区域における植生構造の差異、人口規模と開村年が大きく違う村落における有用樹種の分布の偏りである。そして、生活空間が国立公園になったことによる住民生活の変化や、

地域住民による立ち入りが禁止された区域（管理区域）の設定によって生じた生業活動の葛藤事例も確認された。

3. 考察と結論

国立公園制定にともなう区域の設定と、地域住民の生業である採集・伐採活動は、植生の空間的な差異を生んでいることが推察された。また、有用樹種の分布の偏りは、採集・伐採活動や栽植の影響を受けていることが考察された。農業における農地の開墾位置からは、旧流路地帯の自然条件に基づく開墾や耕作になっていることが考えられ、野焼きは、健全な植生を維持するといった自然管理につながっていることが検討された。

以上から、i) 国立公園に暮らすクエの採集・伐採活動や農業、野焼きなどの生業活動は、周辺植生に大きな影響を及ぼし国立公園の景観を形成していること、ii) しかしながら、自然環境についての深い知識と認識に基づく生業活動は、国立公園の自然保護や管理の役割を担う一面もあることが示唆された。

*本研究は、JASSO エクスプローラープログラム海外派遣、京都大学臨地教育支援センター、京都大学宇宙総合学ユニット・宇宙学拠点・海外派遣プログラムの研究助成により遂行された。